

開催地名：東京都国分寺市	
開催日時	令和2年10月18日（日） 10：15 ～ 11：30
開催場所	国分寺市立第九小学校 屋上
語り部	吉田 亮一 （宮城県仙台市）
参加者	実験試験局（FMラジオ）により、市民向けに放送
開催経緯	<p>当市には、地区防災計画を策定している地区が14地区（1地区策定中）あり、策定より年月が経過し、現在の地域防災計画に沿っていない計画もあるため順次見直しを図っている。しかし、過去に大きな災害に見舞われたことが無く、実体験に基づいた計画ではないことから、本当に計画通りになるのか不安を抱いている。今回、東日本大震災の語り部をお招きし、総務省関東総合通信局から機器の貸与を受けた実験試験局（ラジオ局）を開設して、防災に関する講話を行うこととする。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>私は平成17年より町内会の班長を務め、そこから地域防災に関する計画の立案を始めた。そのあと平成18年に269世帯の町内会総括防災部長となってから進めた5年間にわたる地域防災に関する取り組みを説明したい。</p> <p>防災の基本は「想定以上の備え」をすることにある。まさかと思うような異常気象や災害も自然の一部であり、全て起こりうる現実である。だからこそ、想定以上の備えが必要となる。平成18年から、地域住民の方々には「想定外は言い訳」という言葉を伝えてきた。</p> <p>（2）平成18年から行われた5年間の活動</p> <p>私たちは平成18年から、5年計画を通じてあらゆる準備を進めた。まず、防災マップの作成を進めた。これは地域が独自に行い、防災訓練や災害発生時用として活用した。次に防災マニュアルも、地域独自のものを作成した。この2つをセットにして、全世帯に配布した。経費については市の補助金は利用せず、町内会費から防災費として徴収した。</p> <p>地域では消火班、救護班、救出班、避難誘導班、給食給水班、報告連絡班、警備班からなる自主防災組織を設立した。班長が一時避難所で災害状況を確認後、それぞれの役割を担うためのものである。持ち回りのため、5、6年もたてばほとんどの世帯の人々が経験することになる。災害時にその班員がいなくても、経験者が担えるようになった。</p> <p>（3）共助とは</p> <p>最低限個人の責任として行うものが自助である。具体的には、家族間での災害発生時の安否確認や連絡方法の確認や、非常用持出品についての確認、自宅の耐震と家具の固定、非常用の備蓄（ローリングストック法）等があげられる。いま</p>

だに災害時には店頭から物がなくなってしまうので、特別なものを用意するのではなく、普段の生活に組み入れながら、常にある程度蓄えておくことを心がけてほしい。

自助公助でできないことをするのが共助であり、共助とは地域全体の取り組みである。地域の取り組みと言いながら一部しか参加していない状況もよく聞くが、子ども、事業者、福祉施設なども地域の一部として一緒に取り組むことが望ましい。地域全員が参加するような防災の仕組み、より多くの人それぞれの役割を知る仕組み、担当がいなくならない仕組みを作り、地域での防災活動を展開していくことが極めて重要である。

(4) 震災時に証明できた共助

東日本大震災では、地域の停電は早期に復旧したが、ガスについては3～4週間、水道は2週間で復旧に要した。発災後、住民はすぐに一時避難場所に集まり、チームごとに安否確認などを行った。災害が発生したらここに集まるという共通認識ができていたため、小学3年生も一人で避難してきた。その後地域指定避難場所へ移動し、訓練どおりの活動を展開した。

炊き出しは普段学校でやっている小中学生が手早く対応してくれた。掲示でもわかりやすいように書いてくれた。小学生にごみ集積所の設置を頼んだら、わかりやすく分別指示も作ってくれていた。部数が限られている新聞をみんなで共有するため、中学生が壁に張り出してくれた。自衛隊が持ってきてくれる様々な物資を体育館に運んでくれたのは小学生であり、中学生は物資の管理台帳を作ってくれ、個数の管理にとっても役立った。トイレ用の水は小学生がプールからバケツにくみ、高校生が運んでくれた。このようにして17日間の運営を、市の手を借りずにやりきることができた。



開催地より

被災経験者から見た自助・共助の重要性について、体験に基づいてわかりやすくお話いただいた。また、災害に対する平時の備えについてもアドバイスをいただけた。今後の防災活動に役立てていきたい。